

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakaisushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円)

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

マルクス経済学の真髓

小林 晃著 「現代と『資本論』を読む」

森 勉……………2

信州松本と岩井章さん

―『小さな花』の「お菜洗い」(上)―

中澤 秀行……………3

悲願と悪夢

―恥を知らない日本の独占資本と安倍政権―

原 野人……………6

超個体(複合共生体)としての生命観

の示す教育課題(下)

藪 芳郎……………9

参院選の構図

滝野 忠……………11

読者からのおたより……………13

旬刊 社会通信

NO. 1207

二〇一六年一月一日号

二〇一六年一月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

マルクス経済学の真髓

小林 晃著 「現代と『資本論』」を読む

小林先生（神奈川大学名誉教授）には、二年前の国労上野反合研新春講演会で講師を引き受けていただき、短い時間ではあったが、今日の社会の諸悪の根源である「国家独占資本主義」について、その核心部についてお話を伺うことができた。

当時、私は次のような質問を先生にしたいと思っていたが、できなかつた。

「アベノミクスでは、まず、企業を元気にして儲けさせ、そのことによって働くものに利益を還元する、ということが盛んに宣伝されてきた。

しかし、実際にやっていることは、消費税で増税した分が、そっくり、企業に減税になってくるし、労働者派遣法の改悪では正社員が今後どんどん派遣に置きかえられると言われている。安倍政権の言うことは嘘であり、企業が儲けることと、労働者の生活が向上することはイコールではないと思う。企業の儲けと、労働者の賃金、資本の側の嘘の宣伝をどう暴くかについてお話しいただきたい。」

「安倍政権がやっていることは、福島の原発が収束もできていないのに、原発の輸出や再稼働をさせようとしたり、海外への武器輸出拡大、自衛隊の増強、沖縄振興策というお金で基地のたらい回しを認めさせようとしている。

原発産業や防衛産業は大喜びだと思う。こんなに露骨に大企業を保護する政権は最近珍しいのではないかと思う。むしろ、『市場原理』とか『民間活力』とか『小さな政府』と言うのが、小泉政権あたりの政策基調であり、郵政も道路公団も民営化してきたと思うが、それが安倍政権になってから変わったのか。

その一方で、労働者と勤労国民は、雇用と労働基準、福祉だけは一貫して切り捨てられてきているが。また、彼らは巨額の財政赤字がある時は『大変だ、消費税しかない、福祉を切り縮めるしかない』と言ったり、最近はまだダンマリになってきているが、この財政赤字をいったいどうしようとしているのか。我々はどうか考えたらいいのか。」

今回、この本を読み、この答がずばり書かれているのに驚いた。

先生は、「ピケティの21世紀の資本」や「福祉国家」「多国籍企業」「アベノミクス」「サブプライム金融危機」などを題材に、「新自由主義」が破たんした後の現代資本主義の本質を論じながら、常に、原則・基本に立ち返って考えることの必要性を讀者に考えさせてくれている。もちろんそれは、資本と賃労働の搾取・階級関係であり、独占資本による階級支配のための国家論である。

とりわけ、一九七八年に書かれた不況（恐慌）についての論文は、特にそれを感じさせる。ここでは「内需拡大による不況克服」論の誤りが、マルクスらの古典を紹介しながら展開され、目から鱗が剥がされるようだ。一〇ページくらいの短い論文なので、学習会でも使ってみたい。

ソ連・東独などの社会主義崩壊につながった「市場経済」論への批判は、改めて、科学的社会主義の理論、頭の整理につながった。

とにかく、今どきの本屋では見つけられなくなった、現代資本主義を論じるバリバリの労農派マルクス主義経済学の本であり、今、を闘う労働者階級の貴重な理論的支えになると思う。

かつて私たちが、国鉄赤字攻撃に右往左往していたころ、小林先生は、国鉄は設備投資で、鉄鋼やセメント、銀行などの独占資本を儲けさせているということを言われていて、大きな励みになったような思い出がある。先生の末永いご活躍をお祈りしながら、この本の紹介とさせていただきます。

(森 勉)

小林 晃著 『現代と『資本論』』(新潮社二〇一五年発行三〇〇〇円+税)

信州松本と岩井章さん

—『小さな花』の「お菜洗い」(上)—

はじめに く「やれど節を屈せず」について く

「最近二十五年間に事情はおおいに変化したが、それでもこの『宣言』のなかにのべられている一般的諸原則は、だいたいにおいて、今日もお完全な正しさを失っていない。個々の点はどこどころなおさなくてはならないだろう。これらの原則を実際にどう適用するかは、『宣言』がみずから言明しているように、どこでも、またいつでも、歴史的にあたえられた事情にかかるとのである。」

というのは、『宣言』の一八七二年ドイツ語版への序文の一節です。「『宣言』のなかにのべられている一般的諸原則」と言うのは、『宣言』をつらぬいている根本思想」でありそれは「唯物史観の命題」のことでしょうし、それは「今日もお完全な正しさを失っていない」というのです。

一九九〇年から二十五年が経ちます。この「二十五年間に事情はおおいに変化」しました。私には常に脳裏を離れぬ想いがあります。それは、このおおいに変化したなかで、歴史科学を学んだ者が「一般的諸原則」を大切に生きると言うことについてです。それは、岩井章さんが言われていた「されど節を屈せず」と言うように生きることだと考えて来しました。

高校・大学と、学問なり科学は、常識や社会通念との闘いであったということ、又、学問し、科学するということは自分の生き方に反映されるし、生き方を確認点検することだと言うように教わってきましたし、間違っってはしないと今も考えています。

「常識というやつは、せまいわが家の中では尊敬すべき日用品であるが、ひとたび研究という広い世界にのりだすと、とんでもない冒険家である。」(エンゲルス／『空想より科学へ』という訳です。

総評・社会党ブロックの解体が確実にになると、解体に反対していた中心的なリーダーだったはずの人にさえ「君はシーラーカンスと思っていたが、宇宙の塵だな！」と公式な場で言われました。それは、長野県評が解散し連合に移行する際反対を唱えた時の事でした。ソ連・東欧の崩壊後、誇らしげに「やつぱり、向坂の爺さんは間違っていたな！」と言っていたのは、かつて「社青同に入ってなければ活動家であっても信用できない！」と言っていた人で、松本ではいろんな意味で有名な人です。

身の回りに起こったいろんな出来事を思い出しますが、極め付けは二〇〇〇年三月末日、この日退職する反動松本市政のトップである総務部長が、早朝私の職場にやって来たことです。行政事務方のトップがぺいぺいの処に来たのです。その一言は「皆うまくやっている、お前だけだ！」でした。

人は皆折り合いをつけながら生きているのは致し方ないことでしょう。どのように折り合いをつけるのか、「されど節を屈せず」と言う時にそれは「どこでも、またいつでも、歴史的にあたえられた事情にかかるもの」なのでしょうが、具体的にどう対応することが正しいのか、生きている間これから先もついて回るのでと思います。

自治労長野県本部活動者学級での岩井章さん ～岩井さんとの出会い～

初めて岩井さんの講演を聞いたのは一九八一年のはじめで、自治労長野県本部が主催する「活動者学級」という労働講座でした。この講座は当時県本部書記長であった篠原稔さんの企画提案で始まったのですが、それには前史がありますので記しておきたいと思います。

篠原さんは長野の地で一九七六年四月より毎月二回、九州大学教授であった近江谷左馬之助先生を講師に『資本論』研究会を行っていました。研究会代表は全通信越委員長の市川秀雄さん、事務局を篠原さんが担っていたと思います。一九七八年九月まで二年半の歳月を掛け、岩波文庫の『資本論』第一分冊が読了したそうです。

一回に費やす研究会は三時間だったという事で、向坂先生の寺子屋⇨向坂村塾の様な研究会だったのだと思います。近江谷先生が来られぬ時は東京教育大学教授の長坂聰先生や、埼玉大学教授の鈴木喜久雄先生がピンチヒッターを務められたそうです。そして労働者教育の必要性を痛感し、自治労長野の活動家育成のために「活動者学級」を開講することを思い立ったそうです。

開講に当たり、勿論近江谷左馬之助先生に講師をお願いしたという訳です。近江谷先生は一九七九年秋に病氣入院されてしまい、翌一九八〇年秋から、この「活動者学級」はリニューアルして再開され、私は一期生の一人として受講が始まりました。

この講座は充実した内容のものでした。概ね二ヶ月に一回、一泊二日で九時間、六カ月連続で開催されるという労働学校でした。受講生の募集があり、私は迷わず応募しました。当時の私としますと結構贅沢な学びの場でした。会場は松本市美ヶ原温泉の遠條別館と言う、今はなくなってしまうた温泉宿でした。内容は次の通りでした。

- 第一講座 「哲学」⇨飯田信夫（労働大学講師）
- 第二講座 「経済学」⇨早川鉦二（愛知県立大学教授）
- 第三講座 「地方自治論」⇨大間知啓輔（北九州大学教授）
- 第四講座 「賃金論&自治体労働者の賃金の仕組み」⇨
諫山正（新潟大学教授）、県本部賃金部長
- 第五講座 「日本と世界の労働運動史」⇨篠藤光行労働大学専任講師
- 第六講座 「当面の情勢と自治労運動の課題」⇨
岩井章（国際労働運動研究協会会長）、栗山益夫（元自治労本部委員長）

私は第一期の終了証書ももらったのですが、続けて第四期までこの労働学校に皆勤しました。無料で一泊二日二食付き温泉宿に泊まれ、受講料も無料というだけでなく、

参加すると毎回二日分の日当が出身単組からもらえるのですから、夢のような気分でした。テキストは『哲学入門』（飯田信夫著：労大新書）、『経済学入門』（小島恒久著：労大新書）、『自治体問題入門』（大間知啓輔著：労大新書）、『世界労働運動の歴史上・下』（篠藤光行著：労大新書）等でした。

毎回同じ内容の講義を聴き続ける私に対して、第三期目の第一講座の始まりに哲学講師の飯田さんから「君は毎回毎回来て、熱心にメモを取って聞いているが、同じ話を何回も聞いて飽きないのかね？ 僕の話は面白いの？」と聞かれました。私は『哲学入門』の内容が、飯田先生と同じように理解できるようになりたいと思っただけで、繰り返し参加させてもらっています。」と言っただけで苦笑いされたことを覚えていません。

この講座の締めくくりは、いつも岩井章さんでした。博学で説得力のある話し方、日本というより世界全体の政治経済情勢に精通しているだけでなく、話の内容は歴史科学の古典にも渡り、私が学生時代に家族法のゼミで必読の指定文献であり、大した理解ができないでいたエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』やベーベルの『婦人論』の内容を紹介された時は本当にびっくりしたものです。

資本主義社会とはどういう社会なのか、私たちの生きている社会の仕組みを、史的唯物論を土台に本当に解りやすく説く講演は説得力があり、ドスが利いていながら繊細な人柄を感じました。総評事務局長を務めた労働者インテリとはこう言う人なのか！と感じ入りました。向坂マルクス、岩井エンゲルスというイメージでした。

岩井さんは松本市白板の出身であることで、より親しみを感じました。「重症な貧乏」の中で育ったこと、高等小学校卒業後松本電気鉄道に勤めた後、給料が三倍の国鉄に転職したこと等々、自分の生い立ちも話されました。

こうした内容は後に出版されたご自身の自伝である①『されど節を屈せず戦後史とともに・岩井章物語』（坂本守著／労大新書 一九八四年刊）や、②『岩井章ひとすじの道50年』（岩井章著／国際労働運動研究協会 一九八九年刊）の中で記されています。①は当時西日本新聞論説委員の坂本守氏が、岩井さんから聞き取りしたものです。坂本守氏は同様に向坂先生とゆき夫人から聞き取りした『向坂逸郎・ゆき叛骨の昭和史』（西日本新聞社刊）も残されました。

戦後の総評・社会党ブロックの運動を牽引した岩井章さんの生誕地である信州松本は、運動の理論的指導者であった向坂逸郎先生とも戦前から関係が深く、戦後の三回に渡る『資本論』の翻訳、そして『マルクス伝』や長い論文は松本市入山辺の扉温泉明神館で書かれました。

明神館も二〇一五年五月に何度目かとなるリニューアルオープンがされ、現在は外国人観光客も多く見受けられるモダンな宿となり、リピーターが多く、海外にも有名なようです。向坂先生が『資本論』の原本や訳本、そして『マルクス・エンゲルス選集』等の入った二つの茶箱を預けられて、一室を仕事部屋として利用されていた頃の、すなわち、向坂先生が明神館のパンフレットの為に筆を取られた頃の温泉宿明神館とは、趣も大いに変貌しています。

（中澤 秀行・つづく）

悲 願 と 悲 夢

— 恥を知らない日本の独占資本と安倍政権 —

総てのことにおいて日本の独占資本とその安倍政権はいよいよ恥知らずである。何千万の命の犠牲の上に不戦を誓ったはずの憲法を蹂躪して、世界に切れ目なく派兵できる戦争立法を強行し改憲を図る。

不均等発展によってGDPで日本を抜き今や米国に迫る新興帝国主義となった中国を目の敵（かたき）にしながら、米帝国主義と共同して、一層都合よい資本の投資先を獲得し、資源や市場を確保するためである。

不況の中で潜在力の大きい商品となった武器の消費や販売を飛躍的に増やすために、遠方の戦争にまで協力し、武器輸出も解禁して世界に売りさばく。圧倒的多数の国民にとっては、再び戦争をしないことこそ悲願であるが、独占資本にとっては戦争のできる普通の帝国主義国に戻すことが悲願である。

総ての政策は、〇・一％にも満たない独占的な大資本家階級のために、労働者も農民も小経営者もますます犠牲にする。沖縄県民の意思と尊厳と命を虫けらのように踏みつける。日本国民の敵は中国等々ではない。日本国民の真の敵はうちの中にいる。大泥棒や強盗は我々の家の中にいるのだ。

消費税を上げる一方で法人税はさらに下げる。労働法制は改悪して非正規労働者およびれる半失業者や実質失業者を増やししながら、労働条件を切り下げ、搾取の度をとめどなく引き上げる。教育も、年金も、医療も、福祉も改悪して、独占資本はどこまでも肥大化しながら延命策を追う。積み立てられた年金基金が自民党政権の人気維持のために使われ、株価下落で損失が出れば、中国のせいにする。

独占資本の利潤こそがすべてのものの上に置かれ、そのためには人間の命など軽いものだ。目先の利潤のためには、原発を次々に再稼働する。使用年数を二〇年も延長する。将来どここの原発が再び大事故を起こしても、福島で示されているとおり、推進した大資本家も政治家も幹部官僚も総て免責される。少しく良識を持った島崎邦彦氏などは原子力規制委員長代理を首にされてしまった。活断層の上に立つ原発さえ、いつの間にか安全にされてしまう。近くに住む人々の安全な避難方法すらないままに、三〇キロ圏内の命も一〇〇キロ圏内の命も独占資本の利潤追求の前には無視される。

福島県では大量の除染廃棄物等が、いまだに野積みされたまま、行く手も定まらないう。廃炉は糊塗策ばかりで、高濃度汚染水があふれる。コミュニティは破壊され、家族は引き裂かれ、健康を奪われる。政府は一七年三月末までに帰還困難区域以外の避難指示を解除して、一八年三月末には月額十萬円の精神的賠償を打ち切る。自主的に避難する人たちの住宅提供も一七年三月末で打ち切りだ。子どもさえも「放射線管理区域」なみの地域にむりやり住めとする。

福島の一四年四月からの二順目の甲状腺検査で、がんと確定した子どもは、すでに一五人（一五年八月の報告から九人増）となった。「がんの疑い」は二四人（同五人増）になった。事故から三年までのこの計三九人は、一巡目検査ではほとんどが「問

題ない」と判断されていた。あの時近県や関東でも放射性ヨードを吸わされた子どもたちも少なくなかった。セシウム等の内部被曝や外部被曝の影響はこれから現れる問題だ。

地球温暖化対策には二酸化炭素を出さない原発を推進するという。原発で生ずる熱エネルギーの七割は海水を加熱するために浪費されることには触れようもしない。

ここでも独占資本と国民の立場は正反対である。我々は原発をすぐ全面停止し廃炉にすべきとする。放射能も二酸化炭素も出さない風力等を始めとする自然エネルギーの拡充を最優先して、当面の不足分は化石燃料の高効率火力でフォローすべきとする。

政府・自民党は原発を重要なベースロード（基底）電源として優先稼働したい。四〇年たったものは二〇年延長し、さらにはリプレースという名目で新設も続けたい。原発で足りない分は火力で補うが、自然エネルギーには力を入れたくない。風力や太陽光発電など分散する不変資本に対して、可変資本（雇用される労働力）の比率が大きくなり、資本の有機的組成を低下させて、生産性向上に逆行してしまうからである。電力も重電機も、福島を経験しながら依然として露骨に目先の利潤を追求し続ける。かくも開明度の低い政府・独占資本は世界に類をみない。多くの労働者が、労資協調、生産性向上の連合に絡めとられているからこそであろう。

本当は、自然エネルギーほど安全で、全面自給できて長期的に安価なものはない。

彼等の胸算用では、高速増殖炉（原型炉が「もんじゅ」）を中心にする核燃料サイクルこそは燃料を増殖し、準国産燃料として、夢のサイクルになるはずであった。天然ウランに微量しか含まれない核分裂性のウラン二三五だけでなく、主成分であるウラン二三八を燃料に転換して有効に利用できる構想である。

炉心にプルトニウムを主に、ウランとの混合酸化物を使い、周りのブランケットには劣化ウラン（ウラン濃縮工場で濃縮ウランを取り出した後のウラン）や減損ウラン（再処理で使用済み燃料から回収されるウラン）を使う。冷却材に水ではなく液化ナトリウムを使うことによって、中性子を減速させることなくウラン二三八に吸収させて核分裂性のプルトニウム二三九を作り、核燃料を増殖させる。

しかしナトリウムが漏れて水や空気と接触すると爆発的に燃える。しかも出力上昇の制御性は極めて悪く、もし燃料被覆管が溶融して高純度プルトニウムが炉の底にたまると核爆発の危険さえ生ずる。こんな装置が「夢の原子炉」どころか「悪夢の原子炉」であることはとうに世界的にも証明されている。

仮にプルトニウムを増殖したとしても、高くつくばかりで、安全性と経済性の両立は不可能だ。一部に軍用炉としてごく小規模のものを持つ国もあるが、発電用の商業炉は完全に破綻している。

高速増殖炉が悪夢と消えれば再処理工場も無意味となる。使用済み核燃料は、再処理しないまま管理保管するほうがはるかにましである。

だが自分の目先の利潤しか考えない電力独占資本は、使用済み燃料を敷地外にもっていつて処理、処分してしまいたい。それには再処理と高速増殖炉によるサイクルが

もつともらしく見える。

核燃料サイクルは既に十二兆円を浪費したが、稼働不能でも毎年千六百億円かかる。さすがの原子力規制委員会も看過できず、「もんじゅ」（福井県）を運営する原子力研究開発機構の交代を勧告してみたが、代りの運営主体はない。これに関わってきた技術者、職員自身が現実性のない悪夢の装置であることを知っているからこそ、何万件もの点検・修理を怠ってきたのであろう。

再処理事業（青森県）は電力会社の出資する日本原燃が事業主体であるが、電力会社の手に負えなくなり、国が監督する「新たな認可法人」に移して、これも税金を使って延命を図るらしい。まともに稼働できず、設備費は当初の三倍の二兆二千億円を数え、一九九七年完成予定だったものが二三回も延期されている。これらの浪費によって、国民の負担がどれほど増えていくことか。

安倍首相が祖父・岸信介も合憲とした核武装にこだわるのは想像に難くない。すでに核兵器六千発分、四八トンのプルトニウムは保有されている。さらに高速増殖炉によれば核分裂性のプルトニウム二三九（と同二四一）の純度の高いものを作ることができる。「もんじゅ」で無理やりこれを作って軽い核弾頭を造り、H2Aロケットで地球上切れ目なく飛ばすことができるようにするのが安倍君等の夢であろう。

このように電力資本は無責任にも重荷を肩から外して国家（税金）に任せ、四月からの電力小売り全面自由化に備える。

二〇〇〇年三月から電力自由化は開始され、電力の購入先を大手電力会社から新電力（特定規模電気事業者）へ切り替える自治体や企業が増えている（とはいってもまだ総電力の数%に過ぎない）。当初の大工場やビルから、スーパーや小工場などにも拡大され、一六年四月からは一般家庭にも適用される。

新電力にはガスや石油や商社に加えて、楽天、オリックス等々の企業が参入する。電気事業連合会として電力九社の様々な提携強化も始まった。東電は北海道、東北、中部の電力三社と提携し、関電も北陸、中国、四国、九州の電力四社と提携して、送配電設備の共同調達を開始した。

異業種と提携しながら相互に他地域に進出するものもある。東電は日本ガスと提携して電気とガスのセット販売を、ソフトバンクと組んで電気と携帯電話のセット販売を始める。東北電力が東京ガスと提携し、首都圏で事業者向けに電力供給する新会社を設立した。東京ガスは埼玉県や茨城県などで都市ガス事業を営むガス五社と家庭向け電力販売で提携する。関電は千葉県市原市のLNG火力発電所をJパワーと三井造船から取得し、首都圏での電源を確保した。……

かねて期待された二〇年からの発送電分離に対しては、東電等は持ち株会社に移行して、分社化で送配電会社を傘下に収めるかたちでお茶を濁す。同じく傘下に電力小売り会社や燃料・火力発電会社を収め、原発は持ち株会社が担う。

このような小売り自由化や発送電分離で、資本の再編と集中は進むが、脱原発が促進されたり家庭用電気料金が下がることはない。収奪者を労働者階級が最終的に収奪することを忘れずに明確な目標とするほかはない。

（原野人）

超個体(複合共生体)としての生命観 の示す教育課題(下)

機械論的遺伝子操作・GMや添加物多量投与の人造食品がもたらすもの

20世紀半ばのDNA生命像解明は、遺伝子改造の夢も生み出してしまった。進化のレベルの生物体の改造を、人間が人工的に生み出すという野心だった。その野心に反し、科学史に残るアシロマ会議(一九七五年)では「水爆をしのぐ危険性」を持つ遺伝子改造技術の凍結まで論議されたのであった。

今、日本では、安価な遺伝子改造作物などが表示もなく、材料として食品に混入している。日米の関係性の中、アメリカを中心とする遺伝子改造の戦略的作物が無表示で輸入され続けている。消費者は、モンサント社などの巨大バイテク企業の生み出した改造作物の危険性に気付く間もなく、経済格差拡大の犠牲となり、選択の自由なき消費行動に追い込まれていく。

日々低下する実質賃金・生活費圧迫の中、安ければよいという行動に駆り立てられているのだ。遺伝子改造作物は、除草剤耐性・害虫耐性などを持たせることで農業の効率化のためと称され生み出されてきた。しかし、その本質は、除草剤を必要条件とする独占的種子販売契約の拡大や自家採種できないF1種子の押しつけなどにみられる農家支配の企業戦略であり、利潤優先でしかないのだ。

人類の技術的勝利ではなく、利潤優先ばかりに傾斜した墮落した企業戦略であり、生命の尊厳に対する無関心さの最たるものである。遺伝子改造は、動物・植物などの垣根を取っ払い、短時間でGM作物などの商品を生み出し続け、安全性のチェックは、おおむね企業に任せられるというお粗末さなのだ。

過去、科学者たちが遺伝子改造を「水爆をしのぐ危険性」と指摘したにもかかわらず、安全性のチェックもそこそこの食品が、経済的弱者中心に、大量消費させられていく。

先進国といわれる日本の子どもたちも「日本は、先進国のはずという幻想」の中のGM作物の消費に確実に組み込まれているのだ。自己の現実に気付かぬ中で、アレルギーや発がんなどのリスクを伴う消費行動を強いられている。

この見えない現実に気付く学習をする権利はないのか。ヒトとして人間としてこの国で安全は、守られねばならないのではないか。知った上の選択は仕方ないとして、あまりに理不尽な状況に置かれることは、公害や原発事故の被災者と同じではないかと思うのだ。危険性がないと誰が断定しているのか。日本では、唯一、開発企業ではないか。

人類は、長い歴史の中で伝統的発酵食品や作物や家畜を選び出し、作り上げてきた。様々な生物たちと共存し豊かなものを生み出してきた。生命の本質を破壊する可能性のある遺伝子改造にもっと謙虚に向き合うべきではないのか。

機械論的生命観で生命を操作する現実に危惧を持たないことが何をもたらしているのか。見えないところで起こる変化に気付きたい。そう願わずにはおれない。

さらに、遺伝子改造が一定の成功に見える影で、柔らかさを持ち再生する生物たちは、実は、大きく傷つけられているとしたらその犯罪性は、人類へのしつぺ返しとしてどのような形で表れてくるだろうか。恐ろしい未来を感じるのは、単なる幻想であろうか。

【話している内容】

- ① バクテリアの進化としてのプラスミド交換↓抗生物質の限界性
- ② 遺伝子改造作物(GM作物)の実情ともたらす可能性：TPPの戦略
- ③ 種子支配の戦略

機械論的生命観・臓器移植の本質のもたらすもの

臓器移植は、故障したパーツの交換・修理並みの医療行為である。移植用臓器を待つ人は、他人の脳死を願ってしまうという事態も生み出している。高度科学技術時代の進展と共に、20世紀から、死者と共に生きる文化の喪失がすすみ、「生きていること、若々しいことの異常な価値アップ」により「死を受容する文化」は吹き飛ばされてしまった現代が続いている。

人間は、過去の人々と共に生きる豊かな時間を失ってしまった。生産性・利益性が最優先する大量生産・大量消費・大量廃棄・欲望拡大型社会の現代は、単一的な効率優先思想に浸食され非効率なすべての人間的行為を摩耗させていく。

死んだ者などほっとけと言わないばかりの明るくきれいな都市文化・死は隠蔽され忌避され続ける。機械論的生体把握を背景に、部品交換技術としての臓器移植が産み出されるはずだ。生命体の再生能力に依拠し、部品交換し、免疫抑制という奇術で乗り切ろうとしている。そして、i p s細胞に象徴されるように、部品作りに奔走している。ヒトの自然はどこにあるのか。

「リセットなき尊厳をどう生き、どう死ぬか。」子どもたちと共に考え続けるような「種まき」の授業ができれば最高だと思うのだ。欲望の拡大だけでなく、従容として限界を受け入れる知恵が生み出せぬものか。

科学の発展とともに失われた、「生き物として生まれ、生き、死ぬ」ありのままのヒトを、素直に自らの頭の中に取り戻す作業を続けていくことが大切なのではないかと思っている。そのため、「共生・共存する私の中の彼ら」を思い起こし、共に生きるイマジネーションを取り戻すことが何かのヒントになるかもしれないと密かに思いを巡らしている。

【話している内容】

- ① あるネイティブの言葉「きょうは死ぬのによい日だ」↓死を隠蔽する現代↓新たな課題としての「死の受容」：レイチェル・カーソンの死の受容（自然をみつめて）
- ② 「脳死」という新たに作られた死↓臓器移植
- ③ QOL↓二つの意味「生活の質」「生命の質」：優生学の生命の選別の意味
三池炭塵爆発と植物状態被災者の生の意味

生命の理解のあり方を巡って：私たちが少しづつ感じていること

- ① 進化という時間の中で、あらゆる生物が深い関係性でつながれていること
- ② 境界のある生物より、密着し変化化する曖昧な生命の原理：プラスミド交換など
- ③ 物質が生物へ発達する確率の高さ：海底熱水孔の微生物の生き方から
- ④ 超個体が示し始めたように生命の姿は、かなりの複雑さを持つ、遺伝子工学や臓器移植にみられる機械論的生命操作は、原子力開発に似て、近視眼的経済主義であり、解決できない様々な課題を先送りする現代的誤謬なのかもしれない

自然の一部としてのヒトのリアル

- ① 生まれたときの物質なんかもう体内に残ってない自然の一部としての皆さんの体
 || 畑の大根と同じ (代謝)
- ② 共生生物のありがたさをもっと理解しよう (共生の豊かさ)
- ③ 長い歴史の食物 (作物・家畜・魚介・昆虫など) たちを大切だと感じよう
- ④ 体内リズムが生きる基準で、眠らない町はおかしいと考えよう
 ただし、心の世界が日常のこの現代と矛盾をはらみ夜の居場所に広がる人間も拡大している矛盾にも気付く
- ⑤ 免疫の力は、長い進化に生きてきた今だと感じ向上させよう
- ⑥ 人造化合物の中には敵対する物が多いと知ろう：代謝に敵対する
- ⑦ 出産時に多くの共生生物をもらえることが母といる幸せの一部と知ろう
- ⑧ ストレスの中で輝く生き物たちとヒトも同じで輝いて生きよう (自分をだめだとか押さえ付ける心を持たされることは、深く考えることでは、人間らしいのかもしれないけど幸せへの道なのか)
- ⑨ オーガニックな食物を素朴に愛そう
- ⑩ 自然の息づかいにシンクロする感性をいとおしく守ろう (藪 芳郎)

参院選の構図

ゆさぶり

新しい年二〇一六年、政治の焦点は七月に予定される参院選だ。自民党の党は憲法改悪、とりわけ国家権力そのものである自衛隊を「国軍」としたい。自民党の願望は参院選でまず単独で三分の二とりたい、それがかなわなければ公明ふくめ、最悪でも自・公、そしておおさか維新である。

安保法制に反対の政党は共産、社民、小沢君の生活、維新、野党第一党だが、安保のあり方で対立を強める民主は、「護憲」の党とはいえない。自民はそれを見越し、「一六年七月、同時選も」と民主を揺さぶる。衆院の党派構成は一四年十二月選挙で自民二九一、公明三五、おおさか維新一三、他無所属を加えなければ三三九+aとなった。衆院任期切れは二〇一七年十二月だから、安倍を支える連中は、まだ「三年ある。時間はたっぷり、世界は『反テロ』に動く、じっくり動けばいい。」

衆院定数は四七五、憲法九十六条が定める改憲への提出条件は三分の二だから三一八。衆院だけなら数の上から可能となる。改憲案つくるのは簡単ではないが。

誘導

参院で三分の二とり、一挙に憲法改悪したい、自民のホンネである。参院の党派構成は改憲政党である自民一一三、公明二〇、おおさか維新六、次代・元氣（旧みんなの党）一〇、改革一の一五〇と無所属の α となる。参院議席は二四二だから、三分の二は一六三となる。

周知のように参院は任期六年、解散はなく、三年ごとに半数の一三二が選挙される。改憲党派改選数は自民五一（六五）、公明九（一一）、次世代・元氣（旧みんな）一〇、改革一（〇）―かつこ内は非改選、他方「護憲」は共産三（八）、社民二（一）、流動的な民主四四（一七）等である。

憲法改憲への案提出には参院でも三分の二が条件。これを超えるには自民は五一をはるかに超える九七、自・公ではあわせ八六、自・公・おおさか維新、元氣・次世代で八〇となる。民主と東京維新の政党再編は必至、おおさか維新、元氣、次世代の自民とからんだ再編はこれからだ。ここから、憲法改悪党派が三分の二を占める可能性は小さくない。

「護憲」党派は非改選が民主一七、共産八、社民一の二六。三分の一は八〇だから、八〇には五四とる必要がある。共産は伸びる、社民はよくて現状維持、問題は民主がどうなるか。安保法制、憲法改悪の発議要件を阻止するには、民主が現有の一七から最低でも五〇とるが前提となる。

民主最大の支持基盤は労働組合・連合、一一人候補をたてる。比例票が焦点となる。百万票で一人だから、全員当選には一五〇〇万票が最低必要だ。前回二〇一三年は七一〇万、前々回一〇年は一八〇〇万票だった。民主党の政党支持率が一〇%弱に対し自民三六%強、とある。この傾向が逆転する可能性は少ない。自民は手中に納めたメディアに民主内の矛盾を喧伝させ、中国の「脅威」、金正恩の「狂気」、「テロ」宣伝を強める。国内政策にあつては「労働組合の賃上げ要求は二%、わが自民党政府は三%を財界に示した。組合よりおれ」自民党を信用した方がくらし良くなる」と。全面的な連合批判である。

共闘

一票の格差は、五増五減の選挙制度変化となった。選挙制度、区割り変化は権力闘争のそのものだ。五増五減の中味は①東京五を一ふやし六、②大阪三を一ふやし四、③兵庫・福岡・北海道二を一ふやし三にし、減らしたのは①新潟・長野・宮城の二を一、②高知と徳島、島根と鳥取を合区し四を二とした。自民党になに一つ損はない。二を一にした三選挙区は自民と民主が議席を分けあつてきた。合区された四国二県のうち高知は民主が自民を退けてきた。合区によって自民は高知の民主をつぶした。二を三にした三選挙区、三を四への一選挙区、五を六にした一選挙区で、自民は最低でも一、あわよくば二の条件をつくった。おおさか維新は自民と一体だ。

参院選選挙区は一人区三二、二人区岡山・広島・静岡・京都の四、三人区兵庫・福岡・千葉・埼玉・北海道の五、四人区神奈川・大阪・愛知の三、六人区東京の一。比例は四八。選挙の帰すうは一人区三二で決まる。ここで多数を得た党が比例を制する。日本の選挙制度はじつにたくみにつくられている。比例一本ならことはかんたんだ、権力党に対し統一名簿をつくればいい。選挙区、一人区が三二もある。複数区は一二で議席数は四一、比例四八の一二一。すべての選挙区に候補出す力のある政党が「安保法案廃案に」の国民の声を実行し、一人区の擁立を押さえる選挙協力をおこなった場合、その党の比例票がどうなるか、予測は難しい。こんななかでの参院選だ。安倍の基盤は強くない。かなり苦しい危険水域にあるともみれる。まずはオゴリである。国会終了直後、安倍は国民の怒りとは反対し、山梨でゴルフさんまい。自民党機関紙『読売』は、「国民と向き合え」と苦言を呈した。

第二に政治とカネの問題が再び浮上していることだ。大企業、投機屋の金庫ははちきれんばかりの状況にある。大きな疑獄がいつ露見してもおかしくない。

第三は安倍の経済政策破たんがだれの目にも明らかになってきたことだ。新三本の矢を評価する者はだれもない。日銀・黒田の「サプライズ」は不発に終わった。

情勢は大きく変わる可能性を秘めている。安保法制廃案の声を一つにする闘いが、安倍打倒の条件をつくる。

(滝野 忠)

◇ 読者からのおたより ◇

批判する力 ともすれば情報のたれ流しに埋没してしまいがちですが、通信で批判する力をもらっています。金額は少ないですが、カンパです。

(神奈川・S)

編集部より カンパと嬉しいおたよりありがとうございます。編集内容、注文してくださればなお嬉しい。退職 来年三月で三人ともに退職します。今回より各自で申し込みます。

(東京北区・I)

編集部より 卒業おめでとう。男人生九十年、自由な時間たっぷりです。

「黒子」 反安保の闘いの中心に、労働組合の存在が感じられないのが残念です。ある指導者が「労働組合が黒子になって、地域で運動にかかわっている」と評価している。組織の動員が低下しているわけで、今こそ自らの闘争課題と結合させて地域に打って出ることです。網走でも安保法成立後も毎回金曜日、集会を継続しています。参院選まで火を消さずがんばります。

(網走・鈴木孝)

編集部より 平和運動フォーラム、全労連傘下の集会参加はけっこうして少なくありません。そして退職者、OBが目立っています。東京でのことです。

駅前行動 戦争法廃止二〇〇〇万署名の駅前街頭行動に、「憲法を生かす会ナダ」としては、十一月三日から六回目の十一月二十九日参加しました。午後一〜二時にJR六甲道駅北ターミナルにて八名、一人はマイク握り訴えます、交替で。先輩の方は「戦争はもうイヤや」、若い学生の人は寄ってきて「書きます!」と、脱原発署名と同じくらしい反応です。

(神戸・I)

編集部より 安倍の経済政策は行き詰まり、ごうまんさとオゴリが批判となって沸き起こるだろうこと必至です。

カンパ 一年分、残りはカンパします。

(神奈川・T、千葉・O、大分・K)

編集部より いつも心にとめていただき感謝です。遠慮なく、活用させていただきます。

(徳島・黒川 征一)

敬意 ご奮闘に衷心より敬意を表します。

(徳島・黒川 征一)

久しぶり 十月の池本セミナーで滝野さんの元気なお姿を久しぶりに拝見しました。(帯広・S) 編集部より 池本さんのお元気なことに大安心、池さんの出番はこれからですね。

(帯広・S)

バックナンバー ありがとうございます。少額ですが、残金はカンパさせていただきます。

(埼玉・佐々木 有美)

編集部より ご活躍のごようす目、耳にしています。さらなるご活躍を。

自問 今年はイスラム世界の様々な問題が一層噴出してきましたが、後世から見て大きな歴史の転換期になるのかもしれないね。同じ年に安倍首相による安保関連法の強行成立が起きたのは偶然とも言えないのではありません。そんな時代の激変の中で自分が何をすれば良いのか、自問する日々です。
(紋別・清野)

編集部より ソ連をはじめ社会主義体制が壊れ、そして中東での戦争。おつしやるように、ナポレオン戦争後の「神聖同盟」の状況ですね。

木下さん 次なる一步 34年間にわたり、電電公社と継承組織であるNTT持株会社に対し、不当な免職処分(解雇)の撤回と、職業病(頸肩腕障害)に対する「安全配慮義務」の責任追及を掲げ闘ってきた木下孝子さんが、自らの意思で闘いの終結を決断した▼同じ熊本県出身という事もあり、東京総行動に参加した際には、木下争議のコースを選び、社前にて抗議のシュプレヒコールを共に上げ、中央支部の大会や旗開きでは争議団としての連帯挨拶を受けてきた者としては、争議を解決出来なかった悔しさが残る▼敵よりも一日長く闘い続けられれば争議は勝てる。しかし、人は歳を取り老いていく。闘い続けられない状況も産まれてくる中で、闘い続けること以上に、終結する決断というものは大変だったと思う▼木下さんは、「家族や多くの労働者に支えられ34年間にわたって闘ってきたことに誇りに思う」と述べられている。今は疲れた身体を休め、次なる人生への一步を踏み出されることを願う▼争議終結にあたっての声明で、「職場における労働組合が、労働者の生活に寄り添い、労働者の健康と生活を守る闘いを組織していれば、発生することのなかった事件だと思えます」と述べられている▼JR職場では利潤第一主義の過密労働のなか、日々労働者は健康破壊の危機に晒されている。木下争議の貴重な教訓として、労働組合は労働者の健康破壊を許さない為に、会社と対峙し、労働運動を職場の中に根付かせることだと思う。(国鉄新聞「奮進」より)

編集部より 木下さんのがんばり、ものすごい。組合がしっかりしてればね！

共に声を 第三回定例会のレポートを送付させ頂きます。この間、私は安全保障関連法反対の国会前抗議行動、地域での街頭・駅頭宣伝、超党派議員での駅宣、署名活動等と取り組んできました。区議会でも戦争法の廃案を求める請願が第二・三回定例会で提出され、審査されましたが、二回とも自民・公明の反対により、不採択となりました。

戦争法が成立してしまっただけ、これからは実行させないための取り組みをしていかなければなりません。労働、福祉、社会保障、税制等、どれをとっても、安倍首相の言う「国民の生命、生活を守る」とことは反対に改悪され、現場と生活は逼迫する一方です。安心して生活していける社会をつくるために、共に声を上げましょう。(葛飾区議・みずま雪絵)

編集部より リポートありがとうございます。議員生活は自主管理です。お身体大切に。

値上がりで悲鳴ー移転費用 子供たちが心配で原発周辺から移転したいが、家屋、宅地の賠償ではとても新築できない。なぜなら宅地は三倍、家屋の単価は通常の二倍から値上がりし、工事費もオンラインピックなどの関係で上昇しているためだという。

農家は田畑をはじめ多くの財産を保有していたが、全て原発事故により奪われた。その賠償をつぎ込み新居をたてて移転しているのが現状だ。孫末代まで続くはずだった田畑をなくしたのでそこからその後生活が大変になります。老後生活の蓄えがないのに借金をして移転しなければならぬ。事故後五年で明らかになったのは二度と3・11以前に「復興」「復興」と叫んでも戻れないことだ。東電と国は被害者に対し次のステップに進めるような賠償責任を早急に行うべきです。

(原発事故被害者相双の会「No.42」二〇一五年十一月一日発行)

出版 10月16日(金)〜18日(日)までの3日間、道庁赤レンガ庁舎前庭において道北観光連盟(上川管内北部の9市町村)主催のフェアが開催されました。音威子府村を代表してe.c.o.おといねっぷが参加、出展し、音威子府をPRしました。音威子府羊羹、味噌、味噌ぶりをはじめ、今回初めて村内生産者の無添加・無農薬「ブルーベリージャム」やねっぷえいどの「初芽むらおこし」そばなど村内の生産者の商品も出展好評をえました。(e.c.o.おといねっぷ通信「二〇一五年冬号」掲載誌を利用) いつもありがとうございます。掲載(第一二〇四号『まやかしの教育三条市の小中一貫教育と小中一体校』の書評)は、同封のメモのようにすれば良かったと思います。非常に良く滝野さんからまとめていただきまして喜んでおります。掲載誌を回りの仲間にもあげようとして利用させていただきます。なお、最近の「新聞」送ります。鶴町俊樹前市議の「バイオマス発電とチップ工場」反対の資料も送ります。この闘いは二年〜三年は続くでしょう。休む暇がありません。

(新潟・三条市、相田邦夫)

編集部より 経過としてこれからの毎日見、考えていなければ、モノを書くのは難しい。相田さんが手を入れて下さった文章にすれば完璧です。